

Vent

音楽教育 ヴァン

vol. 54

巻頭インタビュー

岡田暁生

変わりつつある音楽鑑賞の中で

特集

金子みすゞ記念館を訪ねて

レポート

令和5年度

全日本音楽教育研究会全国大会

富山大会 (小・中学校部会大会・高等学校部会大会)

第18回 東海北陸小中学校音楽教育研究大会 富山大会

参考楽譜

同声二部合唱『のほら』(作詞:高田ひろお 作曲:氏家晋也)

『歌の鼓動』(作詞・作曲:私市 靖)



KYO-GEI



人間と音楽の関わりの新たなる世界の幕開け

ChatGPTに代表されるAI (Artificial Intelligence: 人工知能)の進化と普及が目覚ましい。ソフトバンクグループの孫正義は、これから先10年以内にAGI(Artificial General Intelligence: 汎用人工知能)の時代を迎えとし、「人類史上最大の転換期を迎える。産業が変わる、教育も変わる、人生観も変わる、生き様も変わる、社会の在り方、人間関係も変わる」と語っている。

音楽に目を向けると、生成AIを用いての楽曲制作が行われるようになり、音楽業界に影響を与え始めている。人間とAIが合奏する試みも行われており、AIは音楽の新たなパートナーになるのではないかと考えられている。将来的に、音楽レッスンをしてくれるような対話型のアバターが登場するかもしれない。

AIの活用により、人間と音楽との関わりのスタイルが変容していくことは確実である。音楽が、これまで以上に身近なものになる可能性がある。AIの活用が、人間と音楽との関わりの発展と深化へとつながるよう、哲学、情報工学、音楽学、教育学など様々な学問領域を横断しての論議を期待したい。人間と音楽の関わりの新たなる世界の幕開けが楽しみである。

齊藤忠彦 (信州大学 教授)

Contents

- 3 | 巻頭インタビュー
岡田暁生 (音楽学者)
- 8 | 授業者に訊く
私市 靖 (小平市立小平第五小学校 主任教諭)
- 13 | 特集
金子みすゞ記念館を訪ねて
- 16 | レポート
令和5年度 全日本音楽教育研究会全国大会
富山大会 (小・中学校部会大会・高等学校部会大会)
第18回 東海北陸小中学校音楽教育研究大会 富山大会
- 20 | Kyogei Presents
音楽診断
[第19回] 交響詩編 (監修・解説: 山田治生)
- 22 | Information
- 24 | 参考楽譜 ①
同声二部合唱『のほら』(作詞: 高田ひろお 作曲: 氏家晋也)
- 27 | 参考楽譜 ②
同声二部合唱『歌の鼓動』(作詞・作曲: 私市 靖)
- 34 | エッセイ
新・音から広がる世界 [第14回] 藤原道山

*本誌に記載されている職名は令和5年12月現在のものです。

変わりつつある音楽鑑賞の中で

巻頭インタビュー

Akeo Okada

音楽学者

岡田暁生

聞き手

江田 司

音楽学者の岡田暁生先生は西洋音楽史をご専門とされ、音楽やその歴史観を紐解き、これまでさまざまなメディアを通して発信されています。本インタビューでは、パンデミックの渦中に、「音楽の未来」を追求された著書『音楽の危機』をもとに、変わりつつある社会的環境や音楽の在り方とどのように向き合っていくべきかについて、教育現場の課題も交えながら先生のお考えを伺いました。





● 岡田 暁生（おかだ・あけお）

1960年、京都市生まれ。大阪大学大学院博士課程単位取得退学。大阪大学文学部助手、神戸大学発達科学部助教授を経て、現在、京都大学人文科学研究所教授。文学博士。著書に、『〈バラの騎士〉の夢』（春秋社）、『オペラの運命』（中公新書、サントリー学芸賞受賞）、『西洋音楽史』（中公新書）、『恋愛哲学者モーツァルト』（新潮選書）、『ピアニストになりたい！』（春秋社、芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞）、『音楽の聴き方』（中公新書、吉田秀和賞受賞）、『音楽と出会う』（世界思想社）、『モーツァルト』（ちくまプリマー新書）、『音楽の危機』（中公新書、小林秀雄賞受賞）などがある。

記録に残したい

江田：第20回小林秀雄賞を受賞された、『音楽の危機 《第九》が歌えなくなった日』を拝読して、ほんとうに示唆に富む内容がたくさんありました。はじめに、本書を執筆された経緯をお話いただけますか。

岡田：一つは、記録に残したいという気持ちからでした。新型コロナウイルスの感染拡大が起きてほどなく、劇場は閉鎖され、公演は無観客のオンライン配信に変わった。そんなことはクーデターでも起こらない限りありえないと思っていました。

江田：これまででは考えられないような出来事ですよね。

岡田：劇場が閉鎖される、そのショッキングな感覚。そして、音楽か、それとも生命か、どちらを取るかと迫られる事態。これは記録に残さなくてはと思うに十分な体験でした。これまでの歴史から見ていつか疫病は収まるだろうし、人間というのは喉元すぎれば忘れてしまう傾向にある。だからこそ記録に残し、あの渦中ではこういうことを考えざるを得なかったのだと、ある程度後世の人が理解できるものにしたい、と思ったんです。

江田：短期間でご執筆されたようですが、どれくらいの期間ですか？

岡田：書いたのは2か月ですね。猛烈なスピードでしたね。

ライブの醍醐味

江田：コロナ禍で、先生は演奏会での生音をほとんど聴けなかったのでしょうか。

岡田：そうですね。有観客での演奏会が再開されても、みんな距離を置いていましたよね。

江田：私もアマチュアオーケストラで指揮をしています、みんなフェイスシールドをつけながらやっていましたし、合唱団とは一緒に演奏ができなくなっていましたね。音楽は「三密」…密閉、密集、密接であるというこの3つが外せないと本の中でも随分書かれていましたね。

岡田：はい。それと同時に、やはり世の趨勢には逆らえず、これを機に音楽もどんどんネットを介した形になっていくだろうなと思いましたね。

江田：学校現場では、このコロナ禍で歌うこともリコーダーを吹くこともできず、今まであまり触れられなかった音楽鑑賞が盛んになりました。ところが

盛んになったと同時にデジタル化の流れもあって、結局端末の音源、どちらかというと貧しい音をイヤホンで聴くことが当たり前の世の中になってしまった。音楽鑑賞って本来はライブなはずです。しかしいつの間にか教室の中でCDを聴いたり、DVDを観たりになってしまった。それはどうなのでしょうか……。

岡田：音楽はネットで聴くものという傾向はもうすでにありましたよね。コロナはその傾向を間違いなく後押しするだろうなと思ったので、ライブの醍醐味を知る人間として、爪痕は残しておきたいという気持ちも非常に強く、この本にも思いを書きました。

江田：ライブの醍醐味として印象的なことはありますか。

岡田：実は10年前からジャズピアノを真剣に習っています。いつもアンサンブルの練習をお願いしているドラマーの方が、あるとき、関係者のお弟子筋を集めてセッション大会みたいなイベントを開いてくれたことがありました。大きなライブハウスで距離を十分に取りましたが、あのときの楽しさは一生忘れられないですね。

江田：どのようところが忘れられないですか？

岡田：生音を感じるのは、コロナ禍になってからたぶんそのときが初めてだったんです。生音ってこんなに楽しいものかというのが一つ。それから、音楽を聴くのもいいけどやっぱり

り友達と自分が一緒にできるところがいちばんおもしろい。自分が音楽をできない人だったらこの楽しみは味わえないなと強く思ったのを覚えていますね。

江田：空気感というか、離れていてもだんだん波長が合ってくる感じですね。これはライブでないとできないですね。

岡田：そうです。あのワクワク感っていうのは自分で体験しないと分からない。

小さき声を聴く

江田：少し話を変えますが、この本の副題に「《第九》が歌えなくなった日」とあるように、『第九』についてかなり突っ込んでいろいろなことを書いていますよね。『第九』には「暗がりから光に向かって、そして最後はみんなで友愛を祝福する」という世界観が見られるが、そのような右肩上がりの価値観でいいのかとか、我々はそういった考え方にある意味洗脳されているのではないかと……。違う方向性というのは教育にとっても非常に大事だと思いますので、その辺りについてお話しいただけますか。

岡田：とても大事な話ですね。その問題は、「絆」としての音楽がどういう形でありうるか、という話だと思います。近代社会は「絆」としての音楽で一致団結して頑張って、よりよい明日を目指そうとしてきました。どのような意味でよりよいのかは千差万別ですが。人口や株式、経済などあらゆることが成長すればするほどよかったわけですが、こういう世界観はいくつもの意味で、もう合わなくなってきています。例えば、環境問題。今までの調子で明日も明後日も世界中が成長したら、もう地球が終わりになるのは明らかなことですよね。それからもう一つはパンデミックに続いて起きた戦争です。それぞれの国や地域の理想、価値観がありますから「分断」はどうしても起きてしまう。それがいいとか悪いとかではなく、認めざるを得ない世界状況にあることは間違いのないと思います。そうやってきたときに、「絆」という言葉をもう一度考え直さなければいけないと最近すごく考えます。

江田：「絆」を捉え直す中でどのようなことを重要視されますか。

岡田：一つは、「小さき声(音)を聴く」ことです。大きい音を鳴らしたり、音そのものではない楽譜だけに集中したりすると、ほんとうはすごく小さな音が聞こえていても、それを掻き消してしまう、あるいは気付かないことがあります。例えば、暗闇の中で音楽を聴いたり演奏したりすると、不思議なことにだんだん感覚が変わってきて、今まで聞こえなかった小さ

い音が聴こえてくるようになる。音楽をほんとうに聴くというのはこれに非常に近い経験だと思います。

江田：その話はよく分かります。『第九』とは少し違う世界観ですね。本来、人間の聴力は小さい音を聴き取る力というか、そのようなすばらしい感性をもっていますよね。それを選択的聴取でどちらかといえば無視してしまっていると感じます。

岡田：そうですね。そのような意味で、私はデジタル録音に対して警戒感をもっています。デジタル録音では、人間の耳に聞こえる音、音域の外のデータが不可になります。つまりは内耳を中心とする聴覚の対象のところしか録音されず、実際は鳴っていたのに、高すぎる音波だからとカットされている可能性があるということです。私はライブで聴くほうが聴覚の外側の思わぬ世界が広がるような気がしています。先ほどの聞こえない音、「小さき声を聴く」というのもこの世界に通じるのではないのでしょうか。

実体のない音楽

江田：先生がおっしゃるようにスタジオで録音されたCDなどを聴くと、雑音がほとんど入っていないですよね。

岡田：そうですね、雑音はたいへん重要だと思います。これも私がデジタル化に抱く危機感の一つですが、実体がないということです。例えば今は初音ミクなどボーカロイドで作成された音楽が流行っていますよね。先日も学生から、

音楽の学習はいらないと思う子どもたちも
今はいるかもしれませんが、
60代、70代になったときにいちばん生きる学力として、
音楽はかけがえのない存在になりますよね。



● 江田 司（えだ・つかさ）

1953年、和歌山市生まれ。大阪教育大学大学院修了。元名古屋学院大学教授。36年間国公立小学校音楽専科教諭や和歌山大学教育学部非常勤講師等を歴任。その間音楽（とくに鑑賞）教育研究と並行して、市民オーケストラで管弦楽曲、協奏曲、オペラ、バレエ、合唱曲等の指揮活動を行う。その業績に対して、令和5年度和歌山市文化功労賞を受賞。本誌ではこれまで野村萬斎氏との対談等の記事があり、教育芸術社音楽教科書『小学生の音楽1〜6』著者の1人。



取材は2023年7月10日、京都大学人文科学研究所で行われた

現実の妻と離婚して初音ミクと結婚した男性がいるという驚くような話を聞きまして……。

江田：それは信じられないですね。

岡田：従来の価値観では信じられない話ですが、真剣に考えるべき問題でもあります。仮に初音ミクが声を出さない単なるキャラクターだとしたら、その男性は結婚までしたでしょうか。声は音楽の中でもいちばん身体的で、ある意味いちばんエロティックとも言える楽器です。彼は初音ミクの声にも魅了されたからこそ夢中になったのでしょう。しかし、初音ミクは現実空間にはどこにもいません。要するに、電子音だけの世界には気配とか雑音みたいなものは存在していない。まさにどこにもない空間、ヴァーチャル空間です。それにもかかわらず、彼女はそこに「いる」と思っている人たちが相当数いるという事実には危機感をもっています。

江田：そのような文脈で、先生が本の中で紹介された、フォルマント兄弟の「フレディの墓／インターナショナル」という作品はたいへん興味深かったです。作品の最後に、ノイズがビーと鳴って、それまで聴こえていた声のような音や音楽は、倍音の構成でつくられていたということが分かる。あれには驚きました。

岡田：強烈なアイロニーですね。全てがホワイトノイズからできていて、これだけでなんでもできてしまうということですが、しかし「それだけでいいですか？」というメッセージにも私は感じます。

江田：その皮肉も含めてこれもまた芸術ですね。人間の声のおもしろさというか、そこから広がる世界がある気がします。

岡田：そうですね。デジタル化が加速する中でライブのリア

ルな音楽も忘れないでほしいという思いでここまで話しましたが、その一方で、ひょっとするとそういうデジタルの世界の中から思わぬメディアアートであったり、ヴァーチャルリアリティとしての音楽が生み出されたりするかもしれない、そのことも忘れたくないなと思っています。

読書のような音楽鑑賞

江田：私は曲の勉強をしているときに、よくスマホで音楽を聴きます。貧しいスピーカーですがすごく手軽ですね。

岡田：私もそうです。YouTubeをよく利用していて、今の私の授業ではそれがなければ成り立たないくらいです。

江田：そうですね。YouTubeの鑑賞について何かお考えになることはありますか？

岡田：私の最近の発見ですが、YouTubeはジャズの練習にとっても役立ちます。ジャズはやはり「耳コピ」の世界ですから、何を弾いているのかを確認するためには速度調節の機能は便利です。それから何度でもまるで小説を読み返すみたいに聴き直すことができます。その意味でYouTubeによる音楽鑑賞は、読書に近づいている気がします。読書だと、読み進めるうちに情報が多くなって、いったんページを遡って整理したくなることがありますよね。YouTubeによる音楽鑑賞はこれと同じことができて、それはそれで楽しみが一つ増えたなと思っています。本の中では、「やっぱりライブだ」という方向で申し上げたので、実はYouTubeにも目覚めちゃってというのは少し気恥ずかしいですが(笑)。

江田：学校の音楽鑑賞でもYouTubeが自由に使えれば、音だけではなく映像と一緒に鑑賞することができて子どもたちにとってもよりよいですね。また、いろんな演奏が手軽に見られるというのも大きいと感じます。

岡田：さらに付け加えると、AIが自動でおすすめの動画を表示してくれます。ある程度取捨選択を間違えなければ、なかなかおもしろいものを選んでくれます。

江田：AIといえば、人間がもっている思考や能力を分析しながらできているものですから、AIの上をいく自分たちでなければならぬとおっしゃっていましたね。

岡田：はい。私はYouTubeを申し分なく使いこなせていると思いますが、ただ、それを可能にしているのは、レコードやCDで「もの」として音楽を聴いていたからです。同じように、コンサートの場合にもチケットやプログラム(曲目解説)があり、ある意味「もの」と一体だったと言えます。例えば私たちの若い頃ですと、誰々の指揮するベートーヴェンをとにかく全部聴くとか、この音楽の歴史の中の一区画を自分のものにしたいという気持ちが強烈にあり、それは物欲やコレクション欲にも近いものでした。つまり、そういう経験がベースとしてあったからこそ実体のない音楽鑑賞のよさも分かるのだと思います。いきなり影も形もないYouTubeという大海原というか、宇宙の中に放り出された今の若い人たちは、かつてのような突き詰め方をすることは難しいかもしれません。ネットの情報は膨大で、そこで何かおもしろいものを見つけたとしても、それはAIが導いた偶然的な出会いであり、深く考えたり追求したりする対象にはならないようです。

音楽は一生を楽しく過ごせるパスポート

江田：アフターコロナで社会的環境はもちろん変わってきていますが、教育現場や部活動に絡めて何かご示唆をいただけますか。

岡田：現場の方には頭が下がる思いです。特にこの2、3年は大変だっただろうと……。

江田：現状とは言いますと、やっと教室の中で歌が歌えるようになって、学校の中に歌が戻りつつありますが、しかしこの数年のギャップは大きくて、全てがこれまで通りとはいかなくなっています。試行錯誤する先生たちに元気が付くようなメッセージをお願いできますか。

岡田：分かりました。まず、主にクラシックですが、それ以外のジャンルも含めて、今の日本の音楽家のレベルはとても高いです。では、その人たちがどこで音楽との接点をもったかといえば、その多くは中学校くらいの合唱であり、ブラスバンドだっただろうと思います。そう考えると、学校には



日本の音楽文化を発展させる広大な裾野があると言えます。ただ、その中で音楽家になる人はわずかで、多くの人が一般の大学に通って社会人になっていくのですが、学生の間に、自分で音楽ができる能力を身に付けるということは、一生を楽しく過ごせるパスポートを手に入れるようなことだと思うんです。自分でできるというのが音楽のあるべき姿と私は思っていますので、音楽家になってもならなくても、大事にしてほしいなと思います。

江田：そうですね。学力には18歳の受験で発揮される学力もあれば、就職して20歳で発揮される学力もある。受験に関係ないから音楽の学習はいらないと思う子どもたちも今はいるかもしれませんが、60代、70代になったときにいちばん生きる学力として、音楽はかけがえのない存在になりますよね。

岡田：子どもたちには40年後、50年後に音楽をやっているよかったと思ってもらいたいですし、そういう子どもたちを一人でも増やすというのが、私たちの近々の課題でもありますね。それから先ほど申し上げたこととも関係しますが、今の若い人たちには、もちろんライブ音楽のすばらしさを知ってほしいと思います。その一方で、いちばん多感なときに極めて特異で先端的な経験をした世代の中から、全く新しいユニークなおもしろい感性が育ってくるという可能性は絶対にあるので、先生たちにはその可能性の芽も育ててあげてほしいなと思いますね。パンデミックが明けたからといって対面で歌うことを推し進めるだけではなく、さまざまなことに興味を示してもらえるような活動を続けてほしいですね。

江田：すばらしいお話をありがとうございました。

書籍情報

音楽の危機 《第九》が歌えなくなった日

岡田暁生 著
中央公論新社
定価(本体820円+税)



合唱の様子

授業者に訊く

小平市立小平第五小学校



山崎朋子先生(聞き手)と私市 靖先生(授業者)

今回の「授業者に訊く」でご紹介するのは、東京都の小平市立小平第五小学校6年生の授業です。12月の校内音楽会に向けて、はつらつと合唱、合奏に取り組む児童の姿が印象的でした。対談では、私市先生作詞・作曲の同声二部合唱『歌の鼓動』(p.27「参考楽譜②」掲載)を扱った授業展開やコロナ禍での音楽会開催の意義などについて、お話を伺いました。

授業者：私市 靖 (小平市立小平第五小学校 主任教諭)

聞き手：山崎朋子 (作曲家・合唱指導者・合唱指揮者・元東京都音楽科指導教諭)

本時の授業の位置付け

- 題材「曲想の変化を感じ取ろう」
- 本時は校内音楽会で発表する曲に取り組む学習となる。
- 『歌の鼓動』では、旋律の変化と曲想の変化のつながりを感じ取って歌詞唱を行う。
- 『心に咲く花』では、副次的な旋律の音を確認め、その後ソプラノとアルトに分かれ二部合唱の響きを感じ取って歌う。
- 『ディズニー作品メドレー』(編曲：私市)では、楽器ごとの役割、音色やリズム、旋律の特徴、曲想の変化に気を付けながら、自分が担当する楽器を演奏する。

授業の流れ

学習の内容・学習活動	
導入	○『歌の鼓動』を復習する。 ・範唱を聴き、曲の構成(Aメロ、Bメロ、サビ)を確認する。 ・前時で歌った『歌の鼓動』のサビを歌唱する。
展開	○『歌の鼓動』の曲想の変化を感じ取りながら歌う。 ・旋律の特徴やリズムに気を付けて歌う。 ・繰り返し歌ったり、少人数で歌ったりすることで旋律やリズムを覚える。 ・旋律の特徴やリズム、強弱等を感じ取りながら1番を歌う。 ○『心に咲く花』の二部合唱を行う。 ・前時に学習した副次的な旋律を確認し、全員で歌う。 ・少人数で歌い、音程を確認する。 ・主な旋律と副次的な旋律に分かれ、二部合唱を行う。 ○『ディズニー作品メドレー』 ・範奏をモニターで確認し、合奏のイメージをもつ。 ・それぞれの楽器の役割や音色やリズムを意識して練習する。 ・リズムを合わせることを意識して、全員で合奏する。
まとめ	○本時のまとめをする。 ・本時の演奏の振り返りや次時からの取り組みについての話を聞く。

「心一つに 感動する音楽を」目指して

変声期を考慮した合唱の授業

山崎：本日の授業で1曲目に歌われた『歌の鼓動』は、何時間計画の何回目になりますか？

私市：全3回のうちの2回目です。1回の授業でおよそ10分から15分ぐらい時間をかけています。1回目の授業で楽曲分析を児童と一緒にやって、サビを歌えるように練習しました。本時はAメロ、Bメロを歌って、それができたら1番を通して歌ってという流れです。次回で曲の最後まで進めてしまうつもりです。

山崎：明るくリズムに乗りやすく元気のある曲でいいですね。

私市：『歌の鼓動』はコロナ禍2年目の2021年頃、校内音楽会で歌えたらいいなと思ってつくり始めました。でも、その年の音楽会は結局歌えない音楽会になってしまい、この曲も一度はお蔵入りとなってしまいました。

山崎：小学生が歌いやすそうなメロディーです。授業の導入はさらっと歌で始まりましたが、いつもあのような形で進めていらっしゃるのですか？

私市：時間があるときはしっかりと発声練習をすることもあります。今回

は時間の都合上、この曲が発声練習を兼ねていました。

山崎：既習曲を発声代わりに扱うことはときどきありますね。今日は合唱2曲、合奏1曲と、大きく分けて3つの教材を扱われていたと思うのですが、授業は毎回2〜3教材を扱うような形でしょうか？

私市：そうですね、扱う教材は合唱と合奏の2つが多いです。比重はその時々、曲の扱い方次第で変わります。

山崎：本来の授業計画は展開の授業内容1つを進めます。いろいろなことがやりたい児童にとっては、今日のような授業もよいかと思います。ただ、授業計画の立て方としては工夫がありましたが、大きなめあては1つに絞るほうがよいかと思います。小学生は飽きてしまう児童もいますね。

私市：それはありますね。私はこの学校で4、5、6年生を受け持っているのですが、特に低学年はその傾向が顕著なので、状況に応じて授業のやり方は変えています。また、鑑賞や共通教材などは、それ1つをメインでやってしまうことが多かったりもします。共通教材は歌詞の意味や音楽の要素など教えることが多いし、児童にとってあまり

なじみがないこともあるので、丁寧に扱うようにしています。

山崎：合唱のパートはどのように分けていらっしゃるのですか？

私市：私は基本的に希望制にしています。それで合っている合っていない、バランスが悪くなってしまうというものはありますが、今の段階ではそれでもいいのかなと思ってやっています。ただ、ソプラノとアルトどちらのパートでも歌える児童には、「〇〇さん、ちょっとこっちのパート歌ってくれない？」とお願いして、全体のバランスを取るようにはしています。

山崎：声楽的観点から言いますと、小学校6年生でパート分けをするというのはなかなか難しいです。音が取れない児童がアルトにまわりがちですが、音取りが得意な人がアルトを歌ってくると、アルトパートの旋律のよさをみんなで感じることもできますこともあります。

私市：先生は中学校でどのように指導されていきましたか？

山崎：まず同声二部の曲を歌うときは全パートを全員で学習します。それで、歌いやすい音域を自分で選んでもらいます。きれいな裏声の出し方(歌う声と



『歌の鼓動』の歌詞唱の様子



合唱のパート分けの様子



各楽器の役割を動画で見て理解する

話す声の違い)を体験させてから、時間をかけてパートを決めていきます。流動的に体験しながら、夏休み明けにパートを決めます。

私市：きれいな裏声を体験させるのですか？

山崎：変声していない児童が多い小学校高学年では、ソプラノのメロディーが合唱の中心であると感じる児童が多い

です。アルトの旋律の美しさや声の出し方を学ぶと、アルトに興味をもつ児童が増えていきます。その中で、きれいな裏声で話をする音域が出せるようになると、声を出す楽しさが増えていくと考えています。

私市：ありがとうございます。ふだんから「どっちのパートで歌ってもいいよ」という声掛けはするのですが、アルトのよさも伝えられるといいですね。

山崎：そして、パートについて、さらには変声期について、小学校と中学校の先生が互いに情報を共有したり、学べる場があるとよいと思います。

合奏のパート分けは個々の希望を活かす

山崎：本日の授業では、合唱2曲に続けて器楽合奏にも取り組まれていましたね。

私市：子どもたちは基本的に合奏が好きで、「楽器やりたい」とよく口にします。

山崎：子どもたちは言いますね。

私市：そうなんです。「なんで

もっとやらせてくれないの？」「なんで歌のほうが多いの？」と言われます(笑)。やはり合奏のほうが非日常的なのか、楽しんでいる児童が多いように感じます。これは何年生でも同じです。

山崎：楽器はどのように選んでいるのですか？

私市：どの楽器がどのような役割をもっているのかを児童のタブレット端末を使って

動画で見せて、自分のやりたい楽器を決めさせようでのじゃんけん勝負です。先生によっては先に楽譜を配ってオーディションするという方もいらっしゃいます。

山崎：オーディションすると、落ちた子が悲しむ場合もありますね。

私市：そうなんです。それにオーディションにすると、その楽器が得意な児童が優先的に選ばれてしまうということがあって。

山崎：もともとピアノが弾ける子や何かを習っている子は、すでに楽譜が読めるという点が多少有利になる場合があります。難しいと思います。

私市：もちろん、オーディションも必要だと思うのですが、私はなるべくじゃんけんで決めさせて、子どもたちのスタートラインを等しくするようにしています。

山崎：ちなみにいちばん人気の楽器はなんですか？

私市：木琴ですね。私としてはアコーディオンをもうちょっと頑張っしてほしいと思っているのですが、毎回人気がなくて……。アコーディオンは、吹奏楽でいうところのクラリネット、オーケストラでいうバイオリンのような役割の

楽器なので、そこが充実するといいサウンドになります。

山崎：楽器の数にも限りがありますし、各クラスの中でバランスを取っていくのは大変だろうと思います。サウンドの中心になる楽器の役割を教えてあげるとよいと思います。先生は何か楽器を演奏されるのですか？

私市：大学ではエレクトーンを専攻し、他にはトランペットとコントラバス、少し指揮もやらせてもらいました。あとは、ジャズが好きでピアノトリオやビッグバンドで演奏しています。

山崎：そういったご経験が授業中の指導に活かされているように感じました。リズムカルに授業が進んでいくので、授業の流れがよいと思います。

私市：ありがとうございます。

山崎：先生が元気なのが何よりです。音楽の授業でいろいろなことをやるのは、子どもたちの脳の活性化にもつながると思います。後ろでティンパニを叩いていた児童が必死に練習していたのがすごく印象的だったのと、ドラムの子が上手でした。

私市：ドラムは先にテストをしたんです。このリズムができないと君も苦しいしみんなも苦しいしお互い辛くなるから、できなかったらやめておきなさいということは何人かに言いました。それでもやりたいという児童が何回も動画を見て、しっかりイメージしてきているんだろうと思います。

山崎：軸になる先生がさまざまなことを分かったうえで、子どもたちに多様な機会を均等に与えながら能力を伸ばしていったあげることが大切だなと感じました。

音楽会を見据えた授業実践

山崎：ここからは、ふだんの授業やコ

ロナ禍を境にした変化などについてお伺いできればと思います。まず、年間指導計画における自作曲の扱いについて教えていただけますでしょうか？

私市：年間指導計画における扱いと言いますと、教科書の楽曲と自作曲を差し替える形になります。共通教材など当然教えるべき楽曲がある中で、なるべく教科書のねらいに即

した教材を扱えるよう、自作曲とのバランスは取るようにしています。

山崎：授業中、大切にされていることや、児童への言葉掛けで意識されていることはありますか？

私市：分かりやすく授業をすること、そして児童からなるべく言葉を引き出すことを意識しています。例えば、反応1つにしても、こっちから「はい、分かったね」ではなく、子どもに「分かった」と言わせることを心掛ける。児童が自分で授業に参加している意識を持たせるために、言葉掛けを丁寧にすることや授業の導入で興味を引くような教材を準備することは、毎回気に掛けています。

山崎：子どもたちが主体的に授業に参加できるように授業を工夫するということですね。

私市：初めて扱う楽曲をどのような導入にするかは、毎回悩みでもあり楽しいと



○私市 靖(きさいち・やすし)
小平市立小平第五小学校 主任教諭

ころです。合唱曲であればまず歌詞だけを読ませて、そのあとに音源を聴かせて感想をフィードバックさせるなど、曲との出会いを経て、そこから児童がどう音楽と向き合えるようになるかというのは常に考えるようにしています。

山崎：12月に校内音楽会を控えていらっしゃるのとことですが、コロナ禍を経た今、音楽会を学校行事の一つとして開催する意義をどのようなところに感じていらっしゃいますか？

私市：音楽ってやっぱり発表してなんぼ、聴いてもらってなんぼかなと思っています。学校行事として自分たちが



器楽合奏を指揮する私市先生



○山崎朋子(やまざき・ともこ)
作曲家・合唱指導者・合唱指揮者・元東京都音楽科指導教諭



器楽合奏の練習の様子

やってきたことを発表して聴いてもらう。広いところで大勢で感動を共有して、みんなで音楽ってやっぱりいいものだなと、心に触れること、心が動くこと、それが何よりの勉強かなと思っています。それこそ音楽の根本にもつながると思うんです。なので、感動すること、心を震わすことが「音楽会」なのかなと考えています。

山崎：学校はさまざまなことを学ぶ場所です。コロナ禍を境に音楽会がなくなったという学校もあれば、工夫を重ねていろんな形で残り続けているところもあります。私は、一つ一つ発表して、お互い思いを感じ取っていくというところまで含めて勉強だと思っているので、学校行事としての音楽会は開催する必要があると考えています。最後に、コロナ禍が明けたことによる授業中の変化について、お聞かせいただけますか？

私市：元気に声を出す子、そしてマスクを外す子どもがぐっと増えました。「やっぱり歌うって楽しいね」「声が出せてすごくうれしい」と言ってくれる子もいます。当たり前と言えば当たり前な

のですが、今まで抑えつけられていたものから解放されて、子どもたちもうれしいのだらうなと思います。

山崎：私の勤務していた学校ではコロナの最中、外で合唱の授業をやっていました。黙食もそうですが、人とコミュニケーションを取ってはいけないとか、歌に関わらず禁止しなければいけないことの多かった学校現場はご苦労が絶えなかったと思います。人と肩を触れ合って、こうやって仲間同士で何かが

できる、そんな普通の生活が戻ってきたよかったなと思います。今日は貴重なお話をありがとうございました。



対談の様子

校長先生より

子どもの頃に楽しい思い出をつくること、多くの優しさに触れることはとても大切なことです。その経験が、将来大人になったときの自らの活力になるのですから。本校は、子どもたちが「先生大好き」「友達大好き」「学校大好き」、そして「明日の学校が楽しみ」と思えるような学校づくりを目指しています。教師とはどこまでも自分との戦いです。子どもたちをどれだけ心から大事に思えるか、その中で温かい言葉、支える言葉や雰囲気をも

れだけつくっていけるかが勝負だと思っています。ですので、私たちの戦いに終わりはありません。そういう意味で、先生方には子どもが本気になって考えたいような授業、プロとしての授業力を磨いていっていただきたいと思っています。

松本雅史 先生
小平市立小平第五小学校
校長



金子みすゞ 記念館を 訪ねて

童謡詩人金子みすゞは、今や国籍や世代を問わず広く知られる存在となっていますが、その作品はみすゞの死後50年余り、世の中から忘れ去られていました。その遺稿512編を発掘し再び世に送り出したのが、金子みすゞ記念館館長で童謡詩人の矢崎節夫さんです。みすゞの生誕120年、作品が発表されてから100年という節目の2023年、当社から曲集『わたしと小鳥とすずと』が発刊されました。今回は、本書の制作がスタートするきっかけにもなった金子みすゞ記念館を訪問し、館長の矢崎節夫さんにさまざまなお話を伺いました。



金子みすゞ記念館常設展示室。館内にはみすゞの遺稿手帳(レプリカ)など、貴重な資料が数多く展示されている

みすゞの育った町「仙崎」

矢崎：金子みすゞ記念館は、みすゞさんの生誕100年の誕生日にあたる2003年4月11日に開館しました。開館から20年経って、185万人のお客様にご来場いただいています。

——記念すべき日に開館されたのですね。

矢崎：この記念館はみすゞさんが育った家を復元したものです。生まれた場所は分かっていませんが、少なくとも小学校に上がる前から、金子家はここで「金子文英堂」という本屋さんを営んでいました。みすゞさんが詩を作るようになったのは下関に移り住んでからのことですが、その創作の原点はここ仙崎にあったのです。



金子みすゞ記念館

山口県長門市仙崎1308番地

Tel 0837-26-5155 Fax 0837-26-5166

開館時間 9:00～17:00(入館は16:30まで)

入館料 一般/500円 小中高校生/200円

※団体料金(20名以上)一般/450円 小中高校生/150円



矢崎節夫(やざき・せつお)

1947年東京生まれ。童謡詩人佐藤義美、まど・みちおに師事し、童謡・童話の世界で活躍。1981年刊行の『ほしとそらのしたで』(フレーベル館)で、翌年に第12回赤い鳥文学賞を受賞。童謡詩人金子みすゞの遺稿を発掘し『金子みすゞ全集』(JULA出版局)を編集、以後その作品集の出版に携わる。2003年山口県長門市にある金子みすゞ記念館の館長に就任。2021年児童文化功労賞受賞。

——みすゞさんにとって仙崎とはとても大切な場所だったのですね。

矢崎：「王子山から町見れば、わたしは町が好きになる。*」——詩人や作家にとって、“ふるさは遠きにありて思ふもの”なんですよ。みんな故郷の苦い思い出をもって作家になったりしているわけですから。でも、みすゞさんは文学者として自分の町が好きだと言った珍しい方です。おもしろいのは、ふつう文学者ってみんな呼びつけにされるんですよ。宮沢賢治さんも新美南吉さんも「賢治」「南吉」って言うでしょ。でも、金子みすゞファンは「みすゞさん」と言う。それは、みすゞさんの詩と言葉の力、そして仙崎の風土によるものでしょうね。

* 仙崎八景「王子山」より『金子みすゞ童謡全集』(JULA出版局)



長門市の道の駅センザキッチンに建てられている「大漁」の石碑と金子みすゞ像



金子みすゞの詩の世界

——みすゞさんの詩は国語の教科書にも掲載されていますね。

矢崎：みすゞさんの詩が教科書に載ったのは平成8年からです。みすゞさんの全集が出たとき、最初に関心をもったのは学校の先生たちでした。子どもの個性を大事に考えていた先生たちが「わたしと小鳥とすずと」を読んで、「子どもたちにぴったりの詩だ」と感銘を受け、広めてくれたのだと思います。

——ご自身の創作活動を通して、みすゞさんから影響を受けた点などがありましたら教えてください。

矢崎：僕がみすゞさんの講演会をするとき、「物の見方」について話をします。例えば「大漁」という詩は、この世の中は全て2つで1つだと言っているんです。浜の喜びと海の悲しみ、見えるものと見えないもの。そういう話をするので、だんだん自分の作品もそうした方向に向かっていきますよね。作品っていうのはカーテンを引いた窓なんです。本を開くとはカーテンを開けること。本を読むときや景色を見ると「あー、いいな」と思うでしょ。そこで止まっちゃうと、その作品を書いた人の人生観や宗教観、宇宙観は見えてこないんですよ。ところが、カーテンの向こうの窓も開けるとそれらが全部見えてくるので、いくらでも作品が深く読めてしまう。だから私はみすゞさんの世界を「金子みすゞの宇宙」「みすゞコスモス」と呼んでいるわけです。

——「大漁」は矢崎さんが初めて出会ったみすゞさんの詩だと伺いました。

矢崎：「大漁」は岩波文庫の『日本童謡集』に掲載されていました。そこには著者88名300余編の作品が載っていたのですが、「大漁」を読んだあとには他の作品に全く興味がなくなっていました。その日は大学をさぼって、神保町の古書店を回っていましたからね。

——その後、みすゞさんの作品はすぐに見つかりましたか？

矢崎：全然ないですよ。2編目に出会ったのもその2年後です。みすゞさんがすごいのは、僕の師匠の佐藤義美先生や、北原白秋直系の弟子の与田準一、箕聖歌が、みすゞさんの詩を遺そうとしていることです。記念館の入り口には、彼らが選者を務めたみすゞ作品収載の本が何冊か展示しています。当時の人たちにとって、金子みすゞは雲の上の女神でした。だからみすゞさんの詩は消えなかったんです。

——当時から注目されていたんですね。

矢崎：自分たちは子どもの歌としての童謡を書いていたのに、みすゞさんは童謡の言葉で人間の詩を書いていて、それを誰にも教わずにやっていたわけですから、みんなショックだったのです。

作品を生み出すということ

——矢崎さんが詩人を志したきっかけは何だったのでしょうか？

矢崎：母が詩の好きな人で、僕は小学生の頃から詩集を読んでいました。小学4年生の頃、母は「詩人というのは自分の喜びや悲しみにたたずむだけではなくて、人の喜びや悲しみにもたたずめる最高の職業だ」と僕に言いました。それで詩人になろうと決めたんです。幸いなことに、当時の担任の先生も詩がお好きな方で、毎週新しい詩を原稿用紙に書いては後ろの黒板に貼っていらっしゃった。その詩を覚えて先生に言って差し上



みすゞの作品「つゆ」が掲載された、安藤一郎・佐藤義美編『世界童話文学全集18 世界童謡集』

げると喜んでくださったものです。母の言葉と学校での出来事が、ちょうど合致したというのもあったのでしょうね。

——童謡と詩の違いは何ですか？

矢崎：僕の師匠のまど・みちお先生は、「詩は自分の中の自分で書くもの、童謡は自分の中のみんなで書くもの」と仰いました。そんなのなかなかできることではない、だから、それができた人の作品が遺るんです。みすゞさんの作品には「ここにわたしがいる」という詩がたくさんあります。それはつまり「自分の中のみんな」という意味です。

——ご自身の創作の中で大切にされていることを教えてください。

矢崎：作品の中に自分らしい発見ができるかどうかです。ものを見るとき、人と違う視点で見ることができるとかは大事なことです。まど先生はいつも僕に「作品に自分1人分の責任を持ちなさい」と仰いました。それは「自分にしか書けないものを書く」ということです。作品は自分でつくるのではなく、生まれるものなんですよ。



「みんなちがって、みんないい」に込められた思い

矢崎：みすゞさんの詩を読んでいちばん勉強になるのは、「わたし」の位置が変わることです。「わた

しと小鳥とすず」だから「わたしとあなた」でしょう。でも「わたしとあなた」という自分中心では「みんなちがって」にはならない。だから、「すずと、小鳥と、それからわたし」と、ちゃんと書いてあるわけです。

——「わたし」が最後にくるんですね。

矢崎：そう。自分のことを考えない生きていけない時代に、あれだけ若くして「あなたとわたし」という考えをもっていったというのはすごいことです。みんなこの詩にはいいことが書いてあると思っている。なぜなら「みんなちがって、みんないい」から。でも実際は、「空を飛べない」「地べたを速く走れない」「たくさん唄は知らない」と、できないことしか書いていない。でも、あなたはあなたでいいと書いてある。そこがみすゞさんのよさです。もっと言えば、できないことばかりということは、できる喜びがたくさん待っているということなので、できないことはたくさんあったほうがいいんです。「みんなちがって、みんないい」というのは、誰もが生まれただけで100点満点ということです。テストの点数が1点の子どもにも、100点という尊厳があります。テストの点数だけでは、その子どもを見たことにはならないんです。

——とても大切な考えですね。大人たる我々が持ち続けるべき想いだと感じます。

矢崎：今度、みすゞさんと僕の詩を合唱曲にした本を出していただきますが、合唱のよいところは1人じゃないということに気付かせてくれることです。1人になったときにみんなが歌った喜びを思い出せるというのが、合唱のよさ、本質だと思います。その経験が、その子どもにとっての支えになるかもしれないのですから。

金子みすゞ・矢崎節夫の詩による新しい童謡曲集 わたしと小鳥とすずと - 斉唱・合唱 -

発刊に寄せて



矢崎さんと作曲家の弓削田健介さん、ことりゆきさん

曲集ができて何がうれしいかというと、自分の書いた詩を子どもたちが体で感じて、言葉をリズムにのせて楽しんでもらえることです。まっすぐになって歌うだけでなく、体が自然と動き出すような歌ができたというのはすごくありがたいことで、またそれがこの曲集のよさだと思います。世界15カ国に翻訳されている「すごい金子みすゞ」ではなく、「現代の^{いま}みすゞさんの音楽」を楽しんでいただけたら幸いです。

金子みすゞ・矢崎節夫の詩による
新しい童謡曲集
わたしと小鳥とすずと
— 斉唱・合唱 —



作曲者：弓削田健介 ことりゆき
仕様：B5判、64ページ、CD付き
定価：3,080円
(本体2,800円+税10%)

令和5年度
全日本音楽教育研究会全国大会
富山大会（小・中学校部会大会・高等学校部会大会）
第18回 東海北陸小中学校音楽教育研究大会 富山大会
つなぐ 深める ひびき合う
～豊かな音楽の学び～



記念演奏『富山に伝わる三つの民謡』より「むぎや」

令和5年10月26日・27日、「全日本音楽教育研究会全国大会 富山大会（小・中学校部会大会・高等学校部会大会）」が富山市の富山市民芸術創造センター、富山市立呉羽中学校、富山県立呉羽高等学校、富山市芸術文化ホール（オーバード・ホール）で開催されました。大会の2日間を、小学校部会と中学校部会の発表を中心にレポートします。

夏の名残と秋の訪れを感じる晴天の下、全日本音楽教育研究会全国大会が幕を開けました。富山での全国大会開催は初めてとなります。開催地の富山市は、北に最大水深1,000mの富山湾、東に標高3,000m級の北アルプスを見渡す、標高差4,000mの多様な地形と雄大な自然を誇る日本海側有数の中核市です。富山駅の南側には400年以上の歴史を誇る富山城、北側には自然の美しさと富岩運河の歴史を活かした富岩運河環水公園、江戸から明治期にかけて北前船の交易で栄えたレトロな街並みを残す岩瀬エリアなど、多くの見どころを有します。多様な文化と歴史を併せ持つ北陸の中核市富山で、全国の音楽教育に携わる先生方が一堂に会しました。

本大会の大会主題は「つなぐ 深める ひびき合う ～豊かな音楽の学び～」。「つなぐ」とは、児童生徒と音楽、そして学びをつなぐこと。「深める」とは、学びを深めること。「ひびき合う」とは、旋律やハーモニーがひびき合い、音

や音楽の心地よさを感じ取ることができる状況が生まれることを指します。このように「つなぐ」「深める」「ひびき合う」を大事にして題材構成や指導過程の工夫をすることで、児童生徒に豊かな音楽の学びを得てほしいとの思いが込められています。

小学校部会（1日目）

10月26日午前、小学校部会は富山市民芸術創造センターを会場に6つの公開授業が行われました。表現領域の音楽づくりは、温井礼恵先生（富山大学教育学部附属小学校）、松崎真貴先生（立山町立立山小学校）、鑑賞領域は、辻晶子先生（富山市立堀川小学校）、唐木啓子先生（射水市立中太閤山小学校）が担当しました。

表現領域の歌唱は、宮本晶子先生（富山市立上滝小学校）の「ここをつないでうたおう ～のはらうた～」。『は



宮本晶子先生（富山市立上滝小学校 第3学年）
歌唱：ここをつないでうたおう ～のはらうた～



会場には子どもたちが図画工作科の授業で描いたそれぞれの歌の情景や、主人公の思いや様子を表現した「地図」が飾られていた



井関冴香先生（高岡市立能町小学校）
器楽：音色を生かして、演奏しよう ～2年3組のきらきらぼし～

るがきた』『どんぐり』『ぼくはぼく』『おれはかまきり』を用いた活動です。授業は常時活動のあと、児童が各自で選択した歌を歌い、表現の工夫を確認する作業から始まりました。1人目の歌を聴いて感じたことを互いに伝え合い、2人目の歌と聴き比べたり、表現の工夫を試したりしながら、友達の歌から学んだことを生かして再度自分の表現へとつなげていきます。児童は、歌詞の表す情景や気持ちに合わせて、体を動かしながらのびのびと歌い、積極的に思ったことや感じたことを発言していました。

表現領域の器楽は、井関冴香先生（高岡市立能町小学校）の「音色を生かして、演奏しよう ～2年3組のきらきらぼし～」で、1年時に歌唱の学習で取り上げた『きらきらぼし』を教材に、さまざまな楽器を用いて楽器ごとの音色に注目し、演奏の仕方の工夫を考えました。前時の振り返りを行ったあと、2つのグループの演奏を聴き、表現の工夫について話し合いを行います。友達の演奏の工夫

を試したり、自分たちの楽器の音色に合う演奏を確かめたりしながら、発表会に向けて練習を進めました。グループ活動の際、自分たちの考えた工夫を伝えるために、何度も繰り返し練習に取り組む児童の姿が印象的でした。

中学校部会（1日目）

同日午前、中学校部会は富山市立呉羽中学校を会場に4つの公開授業が行われました。表現領域の器楽は、堀岡麻里子先生（富山市立興南中学校）、鑑賞領域は、米多 彩先生（滑川市立滑川中学校）が担当しました。

表現領域の歌唱は、碓井絵美先生（富山市立岩瀬中学校）の「パート同士の関わりを意識しながら、表現を工夫して歌おう」で、『群青』（作詞：福島県南相馬市立小高中学校 平成24年度卒業生／作曲：小田美樹／編曲：信長貴富）を用いた学習です。授業は曲の構成と歌詞の内容との



碓井絵美先生（富山市立岩瀬中学校）
歌唱：パート同士の関わりを意識しながら、表現を工夫して歌おう



全体の曲の構造や曲想の変化、歌詞の内容との関わりを踏まえて、どのように歌いたいかを意見交換する（富山市立岩瀬中学校 第3学年）



山田喜博先生
(高岡市立国吉義務教育学校)
創作：パート同士の関わりを意識して
リズムアンサンブルを創作しよう



デジタルコンテンツを用いた創作の様子
(高岡市立国吉義務教育学校 第9学年)



生徒のまとめたPowerPointの発表資料

関わりを踏まえ、どのような表現の工夫が必要か、どのように歌いたいか、それを実現するためにどうしたらよいかを、歌唱と、生徒との意見交換を交えながら展開していきます。授業の最後には本時のまとめとして全体合唱を行い、授業の前後で歌がどのように変化したのかを振り返りました。

表現領域の創作は、山田喜博先生（高岡市立国吉義務教育学校）の「パート同士の関わりを意識してリズムアンサンブルを創作しよう」です。「中学生の器楽」掲載の『クラッキング ラプソディ 第1番』に合う8小節のリズムアンサンブルを創作する内容で、生徒たちはデジタルコンテンツやPowerPointなどのICTを活用しながら、ペアでリズムパターンの創作を進めていきました。創作したリズムを手で打ったり、伴奏音源を再生したりしながら、自分たちの思いや意図に合った音楽をPowerPointの発表資料にまとめていきます。中間発表を経て、本時の学習のまとめをOneNoteに入力し、意見を全体で共有しました。

いずれの授業も、生徒たちが積極的に発表や発言を繰り返して、真剣に音楽と向き合う姿が印象的でした。

午後は、富山市民芸術創造センターにて、小中高合同

で5つのワークショップが開催されました。講師に、三宅悠太先生（作曲家）「合唱、歌唱」、後藤朋子先生（東京都日野市立平山小学校）「歌唱の授業」、高倉弘光先生（筑波大学附属小学校）「音楽づくり・創作」、江田 司先生（元名古屋学院大学スポーツ健康学部）「鑑賞」、岩崎喜平先生（越中五箇山こきりこ唄保存会）「日本の音楽」をお迎えし、参加者はそれぞれのワークショップで各領域における実践への理解を深めました。

全体会（2日目）

2日目は、富山市芸術文化ホール（オーバード・ホール）にて全体会が開催されました。開会行事、研究概要発表に続き、文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官の志民^{したみ}一成先生と河合紳和先生による、各分会の指導講評が行われました。小学校分会については志民先生が、「子どもが学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりすることについては、特定の形を取り入れれば主体的な学びになるというものではなく、題材の中でどこに設計するのか、どのように行うのか、適切な時期や方



南砺市立福野小学校スティームドラムクラブ「気分はカリビアン」



南砺市立上平小学校・南砺市立平中学校3年生



富山市立奥田中学校3年生



全員合唱「ふるさとの空」

向を検討し、学習改善につなげていくことが重要」と述べられました。中学校、高等学校部会とワークショップ全体の講評については河合先生が、「指導する立場の私たちが指導を受ける側の視点に立つこと、この経験は多くの気づきを与えてくれます。各講座で学ばれたことを実践の中に生かしていくとともに、学ぶ側の視点を授業づくりに反映させていただければと思います」と述べ、「本大会の成果を皆様お一人お一人がご自身の立場に立って捉え、明日からの音楽教育に生かしていただきたいと心よりご期待申し上げます」と締めくくりました。

続く記念演奏は、4団体の発表が行われました。まず南砺市立福野小学校スティールドラムクラブ「気分はカリビアン」によるスティールドラムやドラムセットを用いた合奏。続いて南砺市立上平小学校・南砺市立平中学校3年生による郷土芸能（五箇山民謡）『こきりこ』、『麦屋節』、富山市立奥田中学校3年生による合唱『翼をください』（作詞：山上路夫／作曲：村井邦彦／編曲：鶴原勇夫）、『ほらね、』（作詞：いとうけいし／作曲：まつしたこう）、トリには、富山県立呉羽高等学校管弦楽部・1年音楽I選択者・富山県高等学校文化連盟合唱専門部が登壇し、管弦楽と

合唱による『富山に伝わる三つの民謡』より「むぎや」（作詞・構成・作曲：岩河三郎）を披露しました。閉会行事の最後には、富山県ふるさとの歌『ふるさとの空』（原詞：布村勝志／補作詞：須藤 晃／作曲：久石 譲／編曲：山下康介）の全員合唱が堂々行われ、富山大会は幕を下ろしました。

コロナ禍以降、昨年の山口大会に続き2度目の対面開催となった富山大会は、今年も多くの参加者で賑わいを見せました。令和元年度の東京大会から継続されてきた、「主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善」、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる力を育む授業づくり」、「指導と評価の工夫」という3つの研究の視点に則り、本大会へ取り組まれてきた諸先生方の授業実践は、音楽教育に携わる私たちに大きな刺激と気づきを与えてくれました。この富山での2日間の学びが、全国の子どもの未来へとつながっていくことを願っています。

次回、全日本音楽教育研究会全国大会は、2024年10月10日・11日に北海道の旭川市で開催されます。

（ヴァン編集部）

音楽診断

Kyogei
Presents

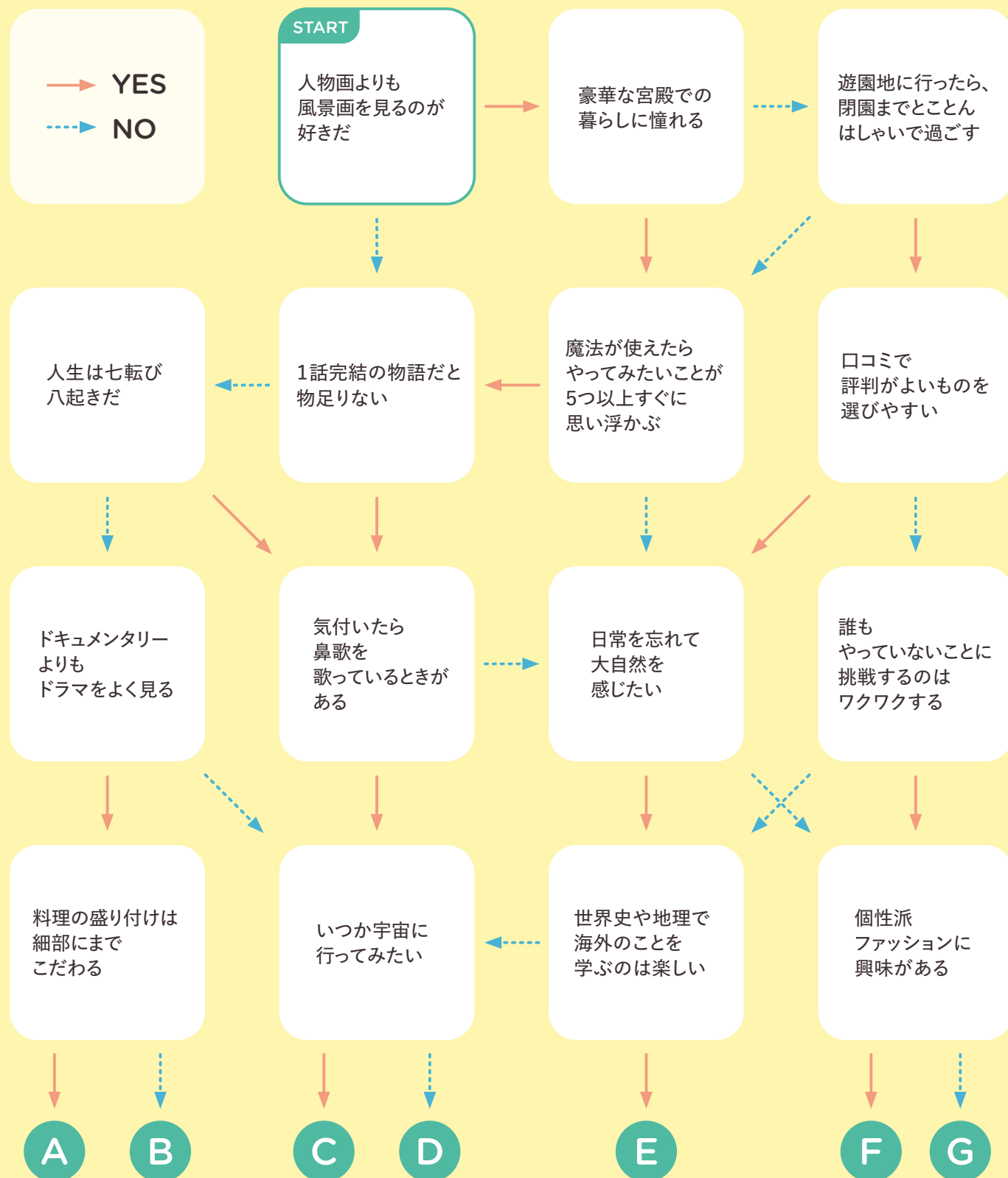
第19回 交響詩編



『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第19弾のテーマは交響詩です。7曲の中から、あなたにおすすめの作品をご紹介します。



監修・解説＝山田治生 Text＝Haruo Yamada



交響詩について

交響詩とは、標題のあるオーケストラ作品の1ジャンルで、交響曲に比べると自由な形式で書かれており、ストーリー性のあるもの（文学作品や絵画や自然の風景と結びついたもの）が多い。物事や出来事を音楽で表すという描写的な性格が強く、楽器がカラフルに使われ、華麗なるオーケストラの魅力が楽しめる。「交響詩」という名称は、フランツ・リストが使い始めたといわれ、リヒャルト・シュトラウスがこのジャンルでの頂点を築いた。

あなたにおすすめの作品は？

A 詩の世界観をコミカルに描く作曲家渾身の一曲
デュカス『魔法使いの弟子』
(初演：1897年／パリ)

『魔法使いの弟子』は、フランスの作曲家デュカスの最も有名な作品。ゲーテの詩に基づく描写的な音楽である。魔法使いの弟子が、師匠が留守の間に、聞き覚えの呪文でほうきに水汲みを命じるが、弟子は呪文の解き方を知らず、家はたちまち水浸しになっていく……。ディズニー映画『ファンタジア』でも使われた名曲。



B スリリングなかつこよさが引き立つ
ムソルグスキー『はげ山の一夜』(作曲：1867年)
(リムスキー＝コルサコフ編曲版初演：1886年／サントペテルブルク)

ムソルグスキーは、「ロシア五人組」の一人。彼は、本作の原典版にあたる、聖ヨハネの前夜祭（夏至の前夜）に魔物たちが集まって饗宴をするという内容の『はげ山のヨハネ祭の夜』という作品を書いた。しかしそれは彼の生前に演奏されず、現在、『はげ山の一夜』として通常演奏されているのはリムスキー＝コルサコフによる編曲版である。



C 哲学思想を躍動的な音楽で表現した超大作
リヒャルト・シュトラウス『ツァラトゥストラはかく語りき』
(初演：1896年／フランクフルト、フランクフルト歌劇場)

ドイツの作曲家リヒャルト・シュトラウスは、超人ツァラトゥストラを描く哲学者ニーチェの同名の著書に惹かれてこの壮大な交響詩を書いた。冒頭のトランペットによる「日の出」が印象的。「大いなる憧れについて」、「歓喜と情熱について」、「学問について」などが描かれ、「舞踏の歌」では独奏ヴァイオリンがワルツを奏でる。



D 国民に愛され続ける感動作
シベリウス『フィンランディア』
(初演：1900年／パリ)

フィンランド独自の音楽の確立に尽くしたシベリウスの代表作の一つ。19世紀末、帝政ロシアの支配下にあったフィンランドで民族主義の気運が高まり、『フィンランディア』は、最初、劇付随音楽の一曲として作曲された。その後、交響詩として単独に演奏されるようになり、フィンランド人の愛国心をかき立てる音楽として人気を博す。



E 祖国への思いを美しい川の情景に託した
スメタナ 連作交響詩『我が祖国』から第2曲「ブルタバ(モルダウ)」
(初演：1875年／プラハ)

スメタナは「チェコ国民楽派の祖」と呼ばれ、ボヘミアの自然や風物を素材として連作交響詩『我が祖国』（全6曲）などを作曲した。「ブルタバ(モルダウ)」は、その2曲目にあたる。タイトルのブルタバとは、チェコ最長の川を指す。近年、この曲は、ドイツ語の「モルダウ」よりも、チェコ語の「ブルタバ」と呼ばれることが多くなっている。



F 色彩豊かな響きに魅了される
ドビュッシー 3つの交響的素描『海』
(初演：1905年／パリ)

『海』は、フランスの作曲家ドビュッシーが、変幻自在に姿を変えていく海を音楽的にスケッチしたもの。穏やかな波から、砕け散る波までが、緻密に描かれている。「海の夜明けから正午まで」、「波の戯れ」、「風と海の対話」の3楽章からなる。初版楽譜の表紙には、葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」をコピーしたものが使われた。



G 大迫力のサウンドにしびれる
レスピーギ『ローマの松』
(初演：1924年／ローマ、聖アウグステオ音楽堂)

『ローマの松』は、イタリアの作曲家レスピーギが、ローマの風物を題材として書いた3つの交響詩「ローマ三部作」の2作目にあたる。「ボルゲーゼ荘の松」、「カタコンベ付近の松」、「ジャニコロの松」、「アッピア街道の松」の4曲からなる。中でもアッピア街道での古代ローマ軍の行進を描く第4曲のクライマックスが圧倒的。



山田治生（音楽評論家）

1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカ ニーニ 大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人 ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の楽しみ方』（以上、アルファベータ）、編著書に『戦後のオペラ』（新国立劇場運営財団情報センター）、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』（アルファベータ）などがある。



研究大会

10月 October

10日(木)・11日(金)

令和6年度 全日本音楽教育研究会 全国大会
旭川上川大会
第66回 北海道音楽教育研究大会 旭川上川大会
旭川市民文化会館 他

〈大会主題〉
音とつながる 心がつながる 学びがつながる

〔問い合わせ〕
令和6年度全日本音楽教育研究会全国大会 旭川上川大会 事務局
旭川市立旭川第五小学校・桜岡中学校 校長 坂東裕美
〒078-8201 北海道旭川市東旭川町東桜岡72
TEL 0166-36-3441／FAX 0166-36-5321
kouchou@sakuraoka.jhs.asahikawa-hkd.ed.jp

31日(木)・11月1日(金)

第65回 九州音楽教育研究大会 沖縄大会
アイム・ユニバース てだこホール 他

〈大会主題〉
伝え合おう 音楽の喜び
つなげよう 未来に向かって

〔問い合わせ〕
八重瀬町立東風平中学校 教諭 西平守良
〒901-0401 沖縄県島尻郡八重瀬町字東風平267番地
TEL 098-998-2107／FAX 098-998-2958



教育芸術社ホームページでは、
この他の研究大会やイベントなどの
情報も掲載しています。

https://www.kyogei.co.jp/data_room/event/

11月 November

1日(金)

第55回 中国・四国音楽教育研究大会 広島大会
第60回 広島県小学校音楽教育研究大会
第55回 広島県中学校音楽教育研究大会
令和6年度 広島県高等学校教育研究会音楽部会研究大会

エリザベト音楽大学
RCC文化センター

〈大会主題〉
つなげる ひろげる 音楽でしあわせ

〔問い合わせ〕
広島市立五日市小学校 校長 河野陽子
〒731-5127 広島市佐伯区五日市三丁目1-1
TEL 082-921-3288／FAX 082-923-9744
hiroshimakenonkyo@gmail.com

8日(金)

第66回 近畿音楽教育研究大会 和歌山大会
第61回 和歌山県音楽教育研究大会
和歌山市・海草地方大会

和歌山城ホール 他

〈大会主題〉
《つながろう》《広げよう》《深めよう》
～心に響く音楽を～(仮)

〔問い合わせ〕
和歌山市立楠見中学校 教諭 久保真紀
〒640-8471 和歌山市善明寺706番地
TEL 073-453-6300／FAX 073-453-6302
<https://wakayamaonren.wixsite.com/onren>
(和歌山県音楽教育連盟 HP)

15日(金)

第66回 関東甲信越音楽教育研究会
新潟大会【長岡大会】

長岡リリックホール

〈大会主題〉
「出会い かかわり ふかめる」
～他者と協働しながら、思いをもって豊かに表現する姿を目指して～

〔問い合わせ〕
長岡市立深沢小学校 校長 藤井美恵子
〒940-2135 新潟県長岡市深沢町3081
TEL 0258-46-3665／FAX 0258-47-4734
26fuka@kome100.ne.jp



Spring Seminar

2024

スプリングセミナー 2024

— 新作合唱曲による公開講座 —

コンクール自由曲向けの新曲発表会「スプリングセミナー
2024」を開催いたします。

同声・女声・混声の作品を作曲者、司会者、合唱団と学びます。

※詳細や最新情報は弊社ウェブサイト等でご確認ください。

●日 程：3月26日(火)

●会 場：東京音楽大学TCMホール
(中目黒・代官山キャンパス)

●司 会：藤原規生

●作曲家：〔同声〕西下航平、名田綾子
〔女声〕根岸宏輔、鶴見幸代
〔混声〕旭井翔一、上田真樹

●合唱団：八千代少年少女合唱団
(指揮：長岡亜里奈)

おうたや

(指揮：田中エミ)

ユースクワイア アルデbaran

Youth Choir Aldebaran
(指揮：佐藤洋人)

●お問い合わせ：
株式会社教育芸術社
スプリングセミナー実行委員会
TEL 03-3957-1168
FAX 03-3957-1740
<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



最新情報は弊社ウェブサイトで
随時公開いたします。
<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



最新情報は、スプリングセミナーの
Facebookでも発信いたします。
<https://fb.me/kgsspringseminar/>

内容は予告なしに変更となる場合がございます。

詳細は
こちら



編集後記

昨年に続き対面開催となった全日本音楽教育研究会全国大会 富山大会。子どもたちが「マスクを外して」笑顔で生き生きと授業に取り組む姿に、前回大会との大きな違いを感じました。コロナ禍を経た今、これまで通り大きな声で歌い、発言し、交流ができる喜びを、児童生徒も先生方も実感する大会になったことと思います。

あらためて、共に音楽ができるすばらしさを知る中で、巻頭インタビューにおいて岡田暁生先生が語られたライブの音楽の重要性、そして「音楽は一生を楽しく過ごせるパスポート」という言葉が深く胸に刺さります。学生時代に音楽を通して得た出会いや経験を、自身の「財産」と回顧する先生の笑顔が印象的でした。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション
たかなかな

写真撮影
津久井珠美

写真提供
芸団協
藤原道弘

イラストレーション
KAnaMi

表紙デザイン・本文組版
STORK

音楽教育 ヴァン



発行者 株式会社 教育芸術社
(代表者 市川かおり)
〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14
TEL. 03-3957-1175(代)
FAX. 03-3957-1174
https://www.kyogei.co.jp/
JASRAC 出 2309334-301
©2024 by KYOGEI Music Publishers. ©-24
本書を無断で複製・複製することは著作権法で禁じられています。

*ヴァン=“vent”はフランス語で「風」。
新しい音楽教育の地平を切り開いていく
願いを込めています。



Recommend

小学生の音楽ワーク1～6

- 令和6年度発行の教科書『小学生の音楽1～6』に準拠し、学習内容や活動をしっかりサポートします。各学年には3枚の評価テストのほか、めあてや活動の達成度を子どもたちが自己評価するためのシールが付いています。3～6年生は、二次元コードから「リズムづくり」や「フラッシュカード」などの学習に役立つデジタルコンテンツを利用できます。
- 各定価400円(本体364円+税10%)／A4変形／各学年24ページ



金子みすゞ・矢崎節夫の詩による新しい童謡曲集 わたしと小鳥とすずと 一斉唱・合唱

- 童謡詩人の金子みすゞと、その詩を世に広めた詩人の矢崎節夫。2人の詩に、弓削田健介、ことりゆき両氏が曲を付けまとめた1冊!
- 収録曲:わたしと小鳥とすずと／こだまでしょうか／ゆうひと おかあさん／かばバルーン／他(全18曲)
- 定価3,080円(本体2,800円+税10%)／B5判／64ページ／CD付き
- ISBN978-4-87788-997-5



小学校 学校行事・授業のための新教材集 ハッピーソング

- 斉唱3曲、二部合唱7曲、器楽合奏3曲の全13曲を収録。授業や音楽会に最適な小学校向けの新しい教材集、待望のシリーズ第3弾!
- 収録曲:ハッピーソング／ペガサス／銀河鉄道999／他(全13曲)
- 定価880円(本体800円+税10%)／B5判／56ページ ●ISBN978-4-87788-979-1



準拠CD(別売り)

- 曲集に準拠した全13曲の範唱・範奏音源の他に、器楽合奏3曲のカラビノ音源が収録されています。
- 価格1,980円(本体1,800円+税10%)／1枚 ●GES-15977
- 歌唱曲のカラビノ音源は、音源配信サイトからのダウンロードによりご購入いただけます。

中学生のための新しい教材集 タイムリーパー

- 手軽に取り組める混声三部のア カベラや混合二部合唱、歌いごたえのある混声四部のア カベラや女声三部合唱、キーボードのみで演奏できる合奏等、多様な編成のアレンジを掲載しています。
- 収録曲:明日を向いて／道を歩けば／タイムリーパー／1/6の夢旅人2002／明日へ／Body Beats／気ままな日曜日／A Whole New World／他(全11曲)
- 定価880円(本体800円+税10%)／B5判／56ページ
- ISBN978-4-87788-998-2



準拠CD(別売り)

- 価格1,980円(本体1,800円+税10%)／1枚 ●GES-16023

混声合唱曲集 クラス用 キミウタ 2訂版

- 魅力的な10曲を新規収録した2訂版が登場!二次元コードから、選曲や演奏に役立つWebコンテンツにアクセスできます。また、新規収録曲の合唱・カラビノと、パート別音源が収録された追補CDが発売されます。
- 新規収録曲:カリブ 夢の旅／風をみつめて／大地のように／星めぐりの歌／虹／懐かしい未来／Annie Laurie／このみち／名づけられた葉／ほらね、
- 定価850円(本体773円+税10%)／B5判／352ページ(全60曲)
- ISBN978-4-86779-061-8



2024年2月
発売予定

合唱・カラビノ 追補CD(別売り)

- 価格5,500円(本体5,000円+税10%)／2枚組 ●GES-16033～16034

パート別 追補CD(別売り)

- 価格8,250円(本体7,500円+税10%)／3枚組 ●KGO-1206～1208



2024年3月
発売予定

小学校・中学校・高等学校教科書訂正のお知らせ



教科書及び指導書の訂正を当社ウェブサイトに掲載しています。誠に恐れ入りますが、ご確認のうえ、ご指導の際にはご留意くださいますようお願い申し上げます。

教育芸術社 LINE公式アカウント



ぜひお友だち登録
してください♪

はじめました!